

Title	「不都合なる活版屋」騒動からみる漱石『文学論』：単行本の本文異同調査を中心に
Sub Title	
Author	服部, 徹也(Hattori, Tetsuya)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	三田國文 No.61 (2016. 12) ,p.31- 49
JaLC DOI	10.14991/002.20161200-0031
Abstract	
Notes	挿資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20161200-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「不都合なる活版屋」騒動からみる

漱石『文学論』

——単行本の本文異同調査を中心に——

服部 徹也

はじめに

漱石『文学論』（大倉書店、一九〇七）を中野重治は「完成された愚鈍」と呼んだが、漱石自身は「未成品」「未完品」「未定稿」ながらも「余が此種の著作に指を染めたる唯一の紀念として、価値の乏しきにも閑せず、著作者たる余に取つては活版屋を煩はすに足る仕事なるべし」（『文学論序』）と記していた。そのささやかな矜持はやがて怒りに変わる。同書発行日は一九〇七年五月七日で、五月一二日の書簡には既に「校正者の疎漏の為非常に誤植多き故訂正表を添へて」送る予定だとある。知人への寄贈は五月三〇日頃まで正誤表の完成を待つてから発送したらしく、「校正者の不埒なる為め誤字誤植雲の如く雨の如く痲癩が起つて仕様がな^い。出来れば印刷した千部を庭へ積んで火をつけて焚いて仕舞^{いた}い⁴」、「是は正誤表に候。古今独歩の誤植多き書物として珍本として後世に残る事受合なれば御秘蔵被^下度候⁵」と書簡中に見える。この怒りは収まらず、校正を

担った中川芳太郎を蚊帳の外に置き、漱石は『東京朝日新聞』紙上で印刷所秀英舎（現在の^大日本印刷株式会社）を相手に一石を投じた。発端となった記事の名から「不都合なる活版屋」騒動とそれを呼んでおこう。筆者・校正者・出版社・印刷所という関係が透けて見えるこの「騒動」を軸に、そこまでの怒りを買うほどの誤植とはいかなるものだったか実態を明らかにし、以て『文学論』諸版本の本文の問題に見通しを立てることが本稿の目的である。

一、校正者は不埒だったのか

「不都合なる活版屋」騒動の内実に立ち入る前に、『文学論』の成り立ちを概観し、誤植が多くなった背景を押さえておきたい。漱石イギリス留学中の構想をもとに東京帝国大学で講義した「文学論」講義（General Conception of Literature）のうち、序盤の「形式論」（漱石没後に刊行、皆川正禧編『英文学形式論』岩波書店、一九二四）を除いた「内容論」、講義

期間にして一九〇三年九月から一九〇五年六月までの二年間が『文学論』にあたる。出版に際しては教え子であった中川芳太郎が草稿を作成し、これに漱石が朱筆で加除訂正を行い、後半部は大幅な書き下ろし原稿に差し替える形で出版に至った。差し替えによって不使用となった部分の中川芳太郎筆草稿「第五編 集合Fの差異」を見てみると論述の目が粗く、論旨を迫りづら⁽⁶⁾い。中川の作業内容そのものは未判明の部分が多いにしても、その作業の困難を物語る資料である。自らのせいで刊行が遅れていると中川芳太郎が責任と焦燥を感じ、精確さと慎重さを欠いたことは事実らしい。刊行経緯について述べた中川芳太郎による「序」の末尾には「明治四十年三月」と記載されている。中川の序文を引いておく(以下『文学論』は断りのないかぎり『漱石全集』一四巻、第二次刊行、岩波書店二〇〇三より引用。引用文中傍線はすべて引用者による)。

始め此著は昨年内を限りとして出版の予定なりしも幾多の事情のため其期を過ぐるごと三月にして今漸くこれを公にするを得たり。遅延の主因としては左のことあり。

原稿整理の囑をうけし余に日々業務ありて時間の全部を以て、これに当る能はざりしこと、

原稿は整理の成るに随つて先生の校閲を乞ひしも、改訂を要する節頗る夥しく殊に最後の一篇の如き全部先生の起稿を煩すに至り而して此間先生は創作に忙はしくして、これに用ゆべき日子の極めて得難かりしこと、

これを印刷に附するに方りても原稿の全部を挙げて托

すること能はざりしを以て勢ひ其進捗遅々として督促其効を致さざりしこと。

(略) 最初二篇は字句の修正にのみ限られしも、中頃、整理の際省略に過ぎ論旨の貫徹を欠く節多かりしを以て、先生の筆を添ふること漸く密に、遂に第四篇の終り二章及び第五篇の全部に至りては悉く先生により稿を新にせざるべからざりしなり。(略) 全部の訂正を終り、先生更に廻つて、初めに簡なりし部分を改むるの意ありしと雖も、参考すべき前半は既に印刷を了へたるものなりしを以て、また如何ともなす能はざりしなり。

一九〇六年二月一九日付中川宛書簡で漱石は「文学論の校正が舞ひ込んで来た是は君の所へ行くのを間違つて僕の所へ来たのだらう」という。前出の「校正者の不埒な為め誤字誤植雲の如く雨の如く」の校正者とは、中川で間違いない。しかし校正者中川は「不埒」だったのだろうか。

「文学論正誤表」は一九〇七年五月中には完成、新聞広告により配布告知された。本稿末尾に【資料】として掲載したのでご覧頂きたい。「文学論正誤表」を見ると、その誤植の膨大さが、原稿作成と兼任する中川一人で抱えきれぬものでなかったことは一目瞭然である。後述する通り、『吾輩ハ猫デアル』や『濠虚集』の漱石自身による校正にも数々の問題点があった。

だが根本的な問題は、一人の校正者では抱えきれないほどに誤植、脱落等を生じる印刷所の方にもあったといえる。この「文学論正誤表」は末尾で頁を遡つて訂正漏れを直したかと思えば「正誤補遺」まで付くという混乱ぶりで、計五三〇箇所以上が

訂正されている。その上この「文学論正誤表」そのものにも誤植や指示箇所の誤りがある。冒頭に掲載された中川芳太郎の謝罪の弁には「殊に巻尾数章の如きは印刷を急ぎ校を重ねる事能はず誤植算なし。よりにてこれを訂正し同時に全編の小瑾と行文の拙なる節をも修正し」とある。そして初版から一月ほど経た一九〇七年六月二〇日発行の第二版が刊行された。清水康次は小宮豊隆宛漱石書簡に「文学論二版御蔭にて出来深謝¹⁰」とあることから、これに小宮が関与したと推定している。ただしこの改訂にも漏れはある(後述)。

この再版発行日直後の六月二四日付鈴木三重吉宛書簡から、「不都合なる活版屋」騒動の準備が始まっている。引用しよう。

拝啓一寸御願が出来た又面倒な例の文学論の事だが。あの中に肯定と否定の間違が四五ヶ所あつて普通の誤植とは思へぬ程念の入つたものであるにより。大倉を以て秀英舎へ掛合つた所。秀英舎は責任なしと威張つて居る由。僕よつて之を朝日新聞紙上に於て筆誅せんと欲するに就ては例の虞美人草崇りをなして筆を執る面倒なり。どうか君僕の代りに書いてくれ玉へ。間違の箇所は僕の所にわかつてゐるから序でに来て見て呉れ給へ。御願頓首¹¹

二日後の三重吉宛書簡では朝日新聞社の渋川玄耳を巻き込んで話が進展しており、

今日渋川先生がわざわざきて君の投書を歓迎すると云ふて来た。然し都合によると六号にする由。僕は何とも云はなかつた。然し出してやつてくれ給へ¹²

という。その後いざ投書を受け取ると難色を示した玄耳に対し、七月二日付書簡で漱石は次のように掲載を懇願している。

拝啓御手紙拝見秀英舎の件は出す事御不賛成の由なれども御賛否は論外としてどうか出して頂き度と存候。小生の立場としてどうしても出して頂かねばならん事情になつて居ります。朝日の大主儀義もしくは大利害に關係ある以上はとにかく然らずんば小生の云ふ事を枉げて御通し被下度候。其代り科学でも医学でも色々(記事執筆者の)周旋をやります。(二字不明)はのけて無理を願ひます¹³

かくて騒動の火蓋は切つて落とされたのである。

二、「不都合なる活版屋」騒動と誤植の実態

以下、「不都合なる活版屋」騒動として三つの記事の全文を引用する。渋川玄耳への懇願の二日後掲載された無署名記事「不都合なる活版屋」(『東京朝日新聞』一九〇七・七・四、三画)は次のように訴えた(圈点原文)。

種々の著作が活字の誤植より飛んだ煩ひを受くる事ありなる誤植又は生物識せいぶつしきの丁寧過ぎたるお切介きりかへは先づ以て是非なけれど活版屋が何か為にせんとして著者に災わざひを計たか企くみたるにはあらざるかと疑はるゝものありとせば捨置難き事共なり、夏目漱石氏の文学論は秀英舎の印刷に係るものなるが一篇中例へば千里が千里、話頭が活頭かつかうとなれるが如き幾十百の誤謬は単に誤植として許すべきも或肯定的の記事が丁寧なる補添によりて否定的となされ否定の命題がわざと肯定的に変ぜられて一章一段の所説全く意義をなさざ

るが如き到底頭腦の意味ある指図なくしては出来し難き複雑なる誤植続々として見出し得らるゝ由而して右秀英舎は只有り得べき錯誤なりと做し且つ其責任は全く著者側の校正者に帰すと号し恬然たりといふ奇怪なる事あり

翌日同紙三面には「弁駁 秀英舎より左の申越あり」として次のようにある。

七月四日貴紙第七千四百九十八号第三面に御掲出の秀英舎に關する記事は事実相違の廉有之候に付茲に其冤を雪ぐ為め聊か弁解致し候其記事の主眼たる夏目漱石氏著の文学論誤植の点に付棒大なる筆誅を蒙りたるも初版の校正は著者親しく再校三校若しくは五校を重ねたるものなるが故に当舎は夫れに信賴し命の儘に作業したるのみ其証左今尚ほ保管しあり初版の印刷物は斯くの如くして最も深重に上梓せり而して其再版に際しては其の訂正増補の個所は注文先の書肆に於て鉛版の象眼を施し其の製版を齎して単に印刷丈の注文を受けたるものなるに付若し著者の意に充たざる所ありとせば此の場合に於ける欠点と看るの外なし是れをしも独り印刷所のみ責を負はしむるは甚だ酷評と云ふべし由來著者は重にも書肆を介して印刷所に注文するより両者の間往々意思の疎通を欠くことあり其結果想はざる不満を著者に与ふることあり本書の如きも或は其一たらざるなきかと観察せられ候に付此全文を掲げて世の妄評を解かれんことを希上候也

これに対し同月八日二面¹⁵で「文学論の誤植に關する夏目氏の談話」という題の記事が掲載される。

「不都合なる活版屋」と題せる本紙去る四日の記事に対し秀英舎は五日所載の如き弁駁を為し来れりこれに就き本社は記事の対当者たる夏目漱石氏の意見を質せる所下の如し。元來文学論の著者は實際校正の任に當らざしてこれを著者の門下生某々等に一任したるものなりされば文学論の校正に就きての不都合は著者が校正者に対して言ふ可き事にして活版屋が著者に対して云々すべき理由なし唯著者は著者の原稿と活版屋の植字とを比較して其誤植の多きを責めんとす殊に其誤植たるや単に普通の誤植たるに止らず又単に誤植の異常なる夥多数なるのみに止らず、其遂に校正の範圍を踰越して反対なる意味を構成するが如き殆んど惡意とも見ゆべき誤植を責めんとするなり由來活版屋は著者の原稿を原稿の如く正直に活字に起すべき職責を有す活版屋が其一字も誤なからんことを自ら責むるものは著者に対する義務にして社会に対する大なる徳義なり、活版屋は何等の理由を以てするも、校正あるが為めに誤植あるも無責任なりと主張し得べき商売にあらざ活版屋は著者側の校正の有無に拘はらず普通の誤植に対してさへも十分依頼者に謝すべき理由を有す況んや上述の如き大なる不都合ある場合をや然るに秀英舎は書肆大倉の照会に対して全く自己の責任なく校正者の責任なりと放言せりといふに至りては余は捨て置き難き横着の振舞なりと信ぜんとす云々

以上が紙面上で交わされた論争である。入社第一作の『虞美人草』の連載が六月二三日に始まって一週間足らず、『文学論』の書評が出始めた頃でもあった。¹⁶そしておそらくこの段階で、

秀英舎と事を構えておくという判断も故なきことではなかった。結果からいえば、この騒動と相前後して、漱石著単行本重版の印刷所が秀英舎から大倉印刷所等へシフトする。

秀英舎と漱石の関わりについて補足すれば、そもそもデビューの場であった『ホトトギス』の印刷所が秀英舎である。たとえば山下浩は『坊っちゃん』について、初出誌『ホトトギス』で印刷所による誤植・改竄があったことを指摘している。「バツタだらうが雪踏だらうが、非はおれにある事ぢやない」で知られる一文は、原稿に「足踏」とあり、漱石が校正をしておらず印刷まで間がなかったことも鑑みて、文選（活字を拾う職人）によって生じた異同と考えられるというのだ。山下はい

う。
『坊っちゃん』の初出が不正確であることをとりたてて強調するのは間違っている。それは、『ホトトギス』における漱石の他の作品に比べれば水準が低い、当時の文学作品の特に単行本、たとえば漱石自身の『濛虚集』初版や『坊っちゃん』を収録する『鶉籠』の印刷に比べて劣るとはいえないからである。一般的に、雑誌の初出は概してそれ以降の単行本の本文より印刷が正確で、原稿の特徴をより多く留め、「不純物」が少ない (unsofisticated) 本文だといえる。

とすると初出よりも初刊が問題だということになる。この秀英舎により『吾輩ハ猫デアル』上中下篇（服部書店・大倉書店、それぞれ一九〇五・一〇、一九〇六・一一、一九〇七・五）、『濛虚集』（服部書店・大倉書店、一九〇六・五）、『文学

論』（前掲）が刊行されたのだ。たとえば『吾輩ハ猫デアル』については、初出の信頼度が非常に高く、「初版の植字職人の技術水準は、『ホトトギス』に比べ非常に劣っている。／校正についても、初版はお座なりであった」と山下はいう。¹⁹⁾『吾輩ハ猫デアル』について森田草平は三冊とも「先生自ら校正された」が「寧ろ校正がしてないと云つて可い位」の誤脱が見られるという。²⁰⁾『濛虚集』もまた漱石自身による校正であったが「誤字誤植沢山有之大に恐縮致居候。校正はしても活版屋が直してくれないのも大分有之厄介千万に候」と書簡にみえる。こうした一連の不満を背景として、五三〇箇所以上の訂正を要した『文学論』は漱石の怒りを買ったのである。

尚悪いことに、先述の通り「文学論正誤表」そのものに誤植や指示箇所誤り及び初版誤脱の見落としがある（筆者調べによるとこれらの問題点は八〇箇所以上）。典型例を挙げておこう。「正誤表」には一三二頁一〇行目、四七三頁一四行目ともに「勃宰↓勃宰」と指示されているが、正しい熟語は「勃宰」であってこれは第二版で適切に修正されているのだから「正誤表」自体の誤り。しかも一三二頁一〇行目と指定しているが正しくは一一行目であるから指示箇所も誤っている。また四三〇頁八行目「強勢のf」とあるべきところ、初版の「f」一字欠字を見逃しているが、これは単行本第二版／第四版でも欠落、縮刷本『文学論』（大倉書店、一九一七）でようやく補訂される（五七二頁二行目「吾人」の「人」一字欠落も同様）。四五八頁一一行目「平凡なる境界↓非平凡なる境界」、五七一頁二行目「失念せざるが如し↓失念せるが如し」は先の談話にいう

「反対なる意味を構成するが如き殆んど悪意とも見ゆべき誤植」にあたらう。

第二版（一九〇七・六・二〇）では正誤表の未反映箇所に加え、新たな誤脱も発生してしまう。顕著な例は、誤字を訂正しようとして行ごと脱落させてしまった四三一頁九行目、四五八頁一行目である（いずれも第三版で修正）。また第二版の特徴として紙貼り修正箇所がある。今回参照した第二版の二冊（早稲田大学図書館津田左右吉文庫所蔵本、同館所蔵大倉書店寄贈本）では、八八頁四行目に「*Pilgrims*」(*Pilgrims*→*Pilgrims*)、八九頁七行目「*Thou*」(*thou*→*Thou*；ただし大倉書店寄贈本には紙貼りがなく *thou* で第三版も *thou*)、二八〇頁一行目「*an*」(*antiquity*→*antiquity*) と紙貼り修正が行われているのだ。

第三版（一九〇七・七・二五）でかなりの部分が修正されるがそれでも誤脱は残る。五七一頁一行目「後等↓彼等」という修正を一文中で二箇所反映すべきところ、第二版で二箇所とも直したにも拘わらず、第三版では文頭が「後等」と再び誤っている。欠字の未補訂や、第二版での紙貼り修正「*Thou*」の未反映もある。

続いて大倉書店は『文学論』第四版（一九一一・四・一五）について「本書品切れの処今回第四版発売又品切れとならざる内速に購求あれ」（『読売新聞』一九一一・五・一二、一面）と広告したが、文字通りの「品切」であるかどうか。大倉書店の火災（一九〇九・八・一六）と秀英舎工場全焼（一九一〇・四・二五）により、紙型と共に『文学論』第三版の在庫は焼失

したと考えうる。やはり秀英舎の手により生まれ、単行本最終版と推定される第四版では全く新たな誤植が発生している。二六頁五行目「*1 chap. XIV*」の部分が一八〇度回転していたり、九五頁一行目「*gandy*」が欠落（なお「正誤表」により「*gandy*→*gandy*」）と訂正された部分）。また「正誤表」訂正前の初版の誤字が復活してしまう例が多々見られる。たとえば二一七頁一四行目「数語↓言語↓数語」、二二〇頁三行目「偷弁↓詭弁↓偷弁」（この箇所「正誤表」自体に誤植あり）、二二三頁一〇行目「祖禡↓祖禡↓祖禡」といった具合である。

三、「文学論」本文の諸問題

以上見てきたとおり、単行本『文学論』の本文は第三版が相対的に誤りが少ないとはいえ、依然不十分な状態に止まっていた。よって『文学論』の本文を考えるうえで単行本だけではなく、没後出版である縮刷本、また『漱石全集』所収本の本文についても考察対象に含めなければならない。ただし、縮刷版及び全集版本文の問題は張我軍による中国語全訳『文学論』（神州国光社、一九三二）の翻訳底本の問題と深く関係するため、別稿を期したい。そこで本節では単行本第四版以後の本文推移の見通しを提示し、本稿のまとめに代えたい。

漱石が一九一六年二月九日に没した半年後の刊行になる縮刷版『文学論』（大倉書店、一九一七・六・三）は初版から大倉印刷所による。その出版広告（『東京朝日新聞』一九一七・六・九、一面）は「訂正改版」と大書して、次のようにいう。

故漱石先生の学者としての造詣を窺ふに足る唯一絶大の書

也。(略) 生来本書の原本は意味を捕捉するに苦しむ箇所
少なからず。偏に難解の書を以て目されしが、今次縮刷増
版成るに当つて、先生が大学講堂に於る講義の草稿と対照
して、厳密なる校訂を経たれば、最早難解の患は一掃され
たりと云ふべし。「文学論」は此縮刷を以て世に出づると
云ふも不可なき也。

しかし実物はこの謳い文句の通りではない。従来の本文に、
若干の字句の修正、文の挿入を加えた程度のことである。た
だ、単行本初版以来の欠字が補われるなど、改めて校正が加え
られたことがわかる。この縮刷本は「厳密なる校訂」というよ
りも、いくつかの些細な書き直しが行われている。たとえば、
漱石が講義で英語で引用したり、英語の術語を用いたのを中川
が原稿作成時に日本語訳した部分が、新たに訳し直されている
のだ。

同じく漱石没後、弟子達により『漱石全集』の刊行が計画さ
れる。岩波茂雄が主導権を握つて、漱石著作の版權をもつ大倉
書店・春陽堂を抱え込んだ漱石全集刊行会を立ち上げ、実質的
には岩波書店と漱石の弟子達による実務により第一次『漱石全
集』が刊行されるのだ。その後の各次全集の事情については矢
口進也『漱石全集物語』(青英舎、一九八五)に詳しい。大ま
かにいえば、第一次全集の本文校訂は森田草平主導で、たとえ
ば『吾輩は猫である』初出や初刊単行本に見られる一人称の揺
れ(「吾輩」「我輩」「余」「余輩」)を「吾輩」に統一(漏れも
あり)するなど、表現の統一・改変を行った。後年悪名高い
「漱石文法」という規則化を計り事に当たったが、なし崩し的

に標準がぐらついた不体裁な本文校訂であったといえる。これ
に収められたのが第一次全集『第八卷 文学論 文学評論』
(一九一八・一二・三〇)、その再刊(ただし新発見の書簡を
増補)である第二次全集『第八卷 文学論 文学評論』(一九
二〇・七・一〇)で、英文学関係の雑誌の訂正などが行われて
いる。次に主導者が小宮豊隆に交代し、震災による紙型消失を
経て第三次全集が刊行される。本文校訂の大まかな方針は漱石
原稿の尊重に傾く。ただし小宮の留学(一九二三・三―一九二
四・九)中に配本が始まっていた第三次全集は、小宮帰国後配
本分について一段と綿密な校訂を行つたらしい。岩波書店員和
田勇と小宮の間で行われた本文校訂に関するやりとりの内実が
山下浩による資料紹介によつて近年明らかにされた。⁽²³⁾第三次全
集の本文関係の資料には『心』の本文異同表のほか、和田・小
宮間での意見交換を記録した大学ノート(一六〇×二〇〇ミ
リ)があり、一冊目は『道草』本文、二冊目は『心』本文、三
冊目は『心』『道草』『文学論』『文学評論』本文について、主
に和田による質問や指摘に対し小宮が答える形でやりとりが行
われているという。とくに『文学論』については「知的材料は
無論、超自然的材料すら他の庇護によりて始めて活動する事斯
の如し。而して其庇護の任にあたる投出語法は既に述べたるが
故に之を反復せず、投出語法と並立して存在するべき投入語法
を説くが此章の目的なりとす。」という第四編第二章「投入語
法」中の二文が初版で別箇所に入、第二版以降全ての版で脱
落していたとの発見が、和田によるものと判明した。本文校訂
作業の具体的な手続きがわかる点で大変貴重な資料である。こ

のように、原稿やこれまでの版本、第一次全集とも照らし合わせて本文校訂を行ったのが第三次全集『第八卷 文学論 文学評論』(一九二五・三・五)だった。

さらに、折からの円本ブームを追うように、一冊あたり一円の普及版『漱石全集』が刊行される(一九二八・三・一五)、『吾輩は猫である』を初回配本。普及版での巻立ての再構成により、『文学論』は独立して『第十一卷 文学論』(一九二八・一一・五)となった。本文は基本的に同一である。

この普及版全集発刊に岩波茂雄の独断専行の色合いがあり、大倉書店・春陽堂へのすりあわせを行っていなかったらしい。それを不服として一九二八年九月一日、当時既に実用書中心にシフトしていた大倉書店が訴訟を起こしたのだ。『岩波書店八十年』(岩波書店、一九九六)から引く。

大倉書店主大倉保五郎氏、夏目純一および岩波茂雄に対し、損害賠償要求の訴訟を提訴一大倉書店は一九〇五年漱石との間に著作権共有、発行権専属の契約を結んであったにもかかわらず、岩波書店より普及版漱石全集が同書店に無交渉で刊行されたため損害をうけたという理由からであった。要求額は三万五〇〇〇円。従来漱石全集は大型のみが発行されており、それについての諒解は漱石全集刊行会で得ていたのであるが、普及版を出すことについては諒解を得ていなかった。提訴はこれについての抗議であった。

岩波書店は鳩山秀夫氏を弁護士として対処し、結局(一九三〇年)八月三〇日に『吾輩は猫である』以下大倉書店発行の漱石の著作四点の出版権を一万円で購入することに

よって示談となった。

示談を受けて少数数刊行された普及版単行本『吾輩は猫である』(岩波書店一九三〇・一〇・一五)の出版広告を掲載した『東京朝日新聞』(一九三〇・一〇・一四、朝刊一面)の紙面は象徴的である。最上段に岩波書店の巨大な『吾輩は猫である』、『行人』(岩波文庫一九三〇・一〇・一五)他の広告が掲載され、同じ紙面の左下のほうにやや小さく大倉書店による広告が「漱石の四大名著××大衆普及の値下」「新定価 各一円五十銭」として、それぞれ縮刷版である『吾輩は猫である』『行人』『濛虚集』『文学論』を在庫処分せんとしているのだ。筆者の入手した縮刷本第一七版『文学論』(大倉書店一九二八・一一・二五)の奥付には、定価記載部分に「定価 金一円五十銭」の紙片が貼られている。縮刷版『文学論』の後版刊行は縮刷版『吾輩は猫である』と同じく一九三〇年まで続いたらしい。その後岩波書店が『文学論』を発行するのは一九三五年のいわゆる決定版『漱石全集』中の『第十一卷 文学論』(一九三六・五・一〇)、及び『文学論』(岩波文庫、一九三九)を待たねばならない。

以上が『文学論』諸版本の見取り図である。本文については特に単行本初版から第三版にかけての訂正が夥しいこと、縮刷本初版での修正、各次全集とくに第三次全集での本文校訂が大きなトピックとなる。そのうち本稿では単行本の誤植の実態を示しつつ、その問題が入社直後の漱石により世に問われたことを示した。漱石の没後、同じ紙面上で著作権委譲を表現するかのような広告の併載が起こったこともまた象徴的である。

おわりに

こうした諸版本と本文の問題は、テキスト受容論にも深く関わる。たとえば第三次全集所収『第八巻 文学論 文学評論』(一九二五・三・五)の刊行前後に、作家が『文学論』に言及する例が集中的に現れるが、とくにその重要な一人は芥川龍之介である。また没後二〇周年に向けた決定版『漱石全集』刊行に併せ、『思想』(第一六二号、岩波書店、一九三五・一一)では漱石特集が組まれる。ここで掲載された小泉信三「理論家漱石」(のち小泉信三『文学と経済学』勁草書房、一九四八に収録)は『文学論』第四編第八章「間隔論」の『アイヴァンホー』読解に注目する早い例である。戦後、『現代日本文学全集 一 夏目漱石集』(筑摩書房、一九五四・一二)でも小泉は巻末解説に同じ論旨を組み込んだ。この巻末解説を読んで三浦つとむは『文学論』に関心を持ち、のちに「夏目漱石における『アイヴァンホー』の分析」を発表した⁽²⁶⁾。それに先だつ一九六五年一〇月執筆の文中で三浦はこう記している。

このごろ、吉本隆明がその講演の中で、漱石について語り、『文学論』を高く評価していると聞いて、さすがだと思ひ、漱石を研究している文学評論家たちは『文学論』をどう扱っているか、彼にたづねてみたことがある。しかし積極的にとりあげて評価している評論家はなく、中野重治に至っては軽蔑的に扱っているとのことであった。抽象的で空虚な創作方法論の横行とこの漱石の仕事に対する評価を思い合せ、革新的な文学運動の弱さがどこから来ている

るかをいまさらのように思い知った次第である。⁽²⁹⁾

さらにいえば、漱石の『文学論』執筆に自身の『日本近代文学の起源』(講談社、一九八〇)執筆を擬えた柄谷行人は、吉本の『言語にとつて美とはなにか』(勁草書房、一九六五)における「自己表出」と「指示表出」を『文学論』の「(F + f)」の言い換えだとした⁽³⁰⁾。林少陽によれば、柄谷行人によって『文学論』が「再発見」され、一九九〇年代に小森陽一によって「理論と創作の実践が理論家漱石と作家漱石においては表裏のものとして、分かちがたく結合されており、なおかつそのときどきにおいて、切断されたものであったという見方に立った研究⁽³¹⁾」が本格化されていく、そこに前田愛の一連の仕事及び遺作『文学テキスト入門』(筑摩書房、一九八八)との呼応関係も想像されるという。『文学論』の受容史・研究史把握は、『文学論』諸版本の本文への認識と共にありたい。あるテキストを精読することが、所与の本文の由来への関心と両立するように、受容史を視座とすることで、いささか無味乾燥で敬遠されがちな本文研究が彩りを増すように思われるからである。

注

- (1) 中野重治、吉川幸次郎、中野好夫(鼎談) 漱石・作品・学問「(図書)一九六、岩波書店、一九六五・一二」。
- (2) 漱石「文学論序」『読売新聞』一九〇六・一一・四、付録。
- (3) 一九〇七年五月二日久内清孝宛書簡(漱石全集)二三三、岩波書店一九九六、五一頁。
- (4) 一九〇七年五月三〇日付菅虎雄宛書簡(同前)、五九頁。
- (5) 一九〇七年五月二日付久内清孝宛書簡(同前)、五九頁。

- (6) 拙論「漱石『文学論』成立の側面——中川芳太郎筆草稿」第五編 集合Fの差異」を視座として——」(『三田國文』六〇、三田國文の会、二〇一五・一二)参照。
- (7) 一九〇六年二月一九日付中川宛書簡(『漱石全集』二二、岩波書店、一九九六)、六四五頁。
- (8) 『漱石全集』(一四、岩波書店、一九九五、二〇〇三)注解で亀井俊介が指摘する通り、原稿と刊本初版では字句が異なる箇所がある。例えば講義での「Quasi-contrast」は原稿では「準対置法」とされているが、刊本では「仮対法」になっている。現在校正刷りは現存が確認されていない。
- (9) 『読売新聞』(一九〇七・六・一、六頁)に「◎読者に告ぐ 夏目漱石著文学論の正誤表出来致候間御入用の方は最寄の書誌より御受取を乞ふ」と大倉書店が広告を出している。
- (10) 一九〇七年七月三日小宮豊隆宛書簡(『漱石全集』二二三)七二頁。
- (11) 清水康次「単行本書誌」(『漱石全集』二七、岩波書店、一九九七、四七五頁)。
- (12) 一九〇七年六月二四日付鈴木三重吉宛書簡(『漱石全集』二二三)、六七頁。
- (13) 一九〇七年六月二六日付鈴木三重吉宛書簡(『漱石全集』二二三)、六八頁。
- (14) 一九〇七年七月二日付澁川玄貞宛書簡(『漱石全集』二二三)、六七頁。
- (15) 『東京朝日新聞』の朝刊(夕刊は一九二二年から発行)では一九〇五年元日から一九四〇年八月末まで一面は全面広告ページであったため、二面から実際の記事紙面。
- (16) 登張竹風「漱石の文学論を評す」(『新小説』一九〇七・七七)。金子筑水「夏目氏の文学論に因みても同月の『中央公論』に掲載予定であったが「病気の為め長論文を草せらるゝこと能はず」不掲載となっている。
- (17) 清水(前掲)にある通り、一部例外がある。『文学論』第四版も

例外。

- (18) 山下浩「本文の生態学 漱石・鷗外・芥川」(日本エディタースクール出版部、一九九三)、八五頁。
- (19) 山下(前掲)、五七頁。
- (20) 森田草平「十三号室」(『帝国文学』一九一八・二)。
- (21) 一九〇六年五月二九日付内田魯庵宛書簡(『漱石全集』二二三)、五〇七頁。
- (22) 林原耕三「漱石山房回顧・その他」(桜楓社、一九七四)収録の「山下浩文法稿本」参照。
- (23) 山下浩「漱石初期岩波全集一編集の現場(連載第2回)」、ブログ「漱石 初期岩波書店 全集編集の現場 小宮豊隆」二〇一三年七月二三日公開記事。二〇一六年九月三日最終閲覧。http://blog.livedoor.jp/sousekitokomiyama-shokiwannami/archives/29844271.html
- (24) この二文は『文学論』原稿(泉立神奈川近代文学館蔵)では貼付け紙片に朱筆で書かれ、挿入箇所指示の記号がある。
- (25) さる愛書家より私信にてご教示頂いた。調査の機会が得られ次第、報告したい。先行研究として川島幸希「夏目漱石の重版本」(『日本古書通信』八一・四、日本古書通信社、二〇一六・四)参照。
- (26) 芥川の漱石意識については小澤純「二鼻」を『傍観』する——夏目漱石『文学論』を視座にして」(『芥川龍之介研究』七、国際芥川龍之介学会事務局、二〇一三)が詳しい。また千田実「芥川龍之介の内容形式論——『文芸』一般論」を中心として」(『文学研究論集』三〇、明治大学大学院、二〇〇八)では「文学論」のみならず、芥川の理論的著述に相前後して刊行された『英文学形式論』(岩波書店、一九二四)との関連性にまで踏み込んでいる。
- (27) この経緯は三浦つとむ「夏目漱石の「空間短縮法」」(三浦つとむ選集『四芸術論』、勁草書房、一九八三)冒頭に述べられている。
- (28) 三浦つとむ「夏目漱石における『アイヴァンホー』の分析」(同前。初出は『現実・弁証法・言語』国文社、一九七二)。なお『文

- 学論』における『アイヴァンホー』読解部分の重要性については拙稿「漱石における「間隔的幻惑」の論理——『文学論』を精読し「野分」に及ぶ——」（『三田國文』五八、三田國文の会、二〇一三・一一）参照。
- (29) 三浦「夏目漱石の「空間短縮法」」（前掲）。ただし一九六五年一〇月に執筆し未発表、『三浦つとむ選集』（前掲）掲載に際して「わずかの補筆を行った」とある。ここでいう中野重治の言が本稿冒頭で引用した中野の発言を指すなら吉本との対話時期は同年一二月よりも後にならう。あるいは中野に他の発言があったか。
- (30) それぞれ、柄谷行人「文庫版あとがき」（『日本近代文学の起源』講談社文芸文庫、一九八八）、同「飛躍と転回」（『文学界』文藝春秋、二〇〇一・一二）参照。
- (31) この表現は小森陽一「〈文学批評〉研究の現在」（『国文学解釈と教材の研究』三九・二、学燈社、一九九四・一）による先行研究の整理に由来し、それを林が小森本人に当てはめたもの。
- (32) 林少陽「事件」としての『文学論』再発見——漱石『文学論』解説の思想史——」（『文学』一三・三、岩波書店、二〇一二・五）。
- 付記 本研究は二〇一六年度慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラム「夏目漱石『文学論』の成立過程と本文の研究」による成果の一部です。

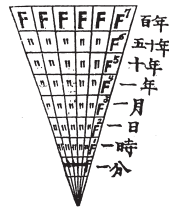
（はっとり・てつや）

文学論正誤表

余の校正周密を欠き先生の原意を損せし事一二止まらず殊も巻尾數章の如きは印刷を急ぎ校を重ねる事能はず誤植算なし。よりにこれを訂正し同時は全篇の小瑾と行文の拙なる節をも修正し一葉の正誤表も收め第一版の讀者も頗ち責任のあるところを明しして謝意を表す。

中川 芳太郎

頁	行	誤	正
二	九	ケムブツツヂ	ケムブリツヂ
三	七	骨格	骨格
六	五	遠かれる	遠かれる
	十	檢點	點檢
九	二	性質のれ程に	性質のそれ程に
一	五	洋行するにあらす	洋行せざるにあらす
三	七	節分	區分
	八	中川氏の	中川氏は
五	六	空氣は	空氣の
	七	Fに伴ふてf	Fに伴ふてfを
一〇	一	時代の下	時代のF



頁	行	誤	正
一九	三	骨格	骨格
	五	輝	輝
二	七	of ship	of the ship
	九	black	black,
五	十	shimberly pont first slumberly pont just	passions base
六	四	partions face	波のウネ
七	七	彼のウネ	Pantomime
九	十	Pantomime	Pantomime
二九	十	motion	運動
二九	一	form	形
	二	sound	音
	三	brightness	輝
	四	colour	色
	五	smell	嗅
	六	touch	觸
三〇	八	dream in	dream dwell in
	十	axles	axles spinning,
	十一	swiftness	swiftness,
	十三	solemnly	solemnly
三一	八	seem	seem
	十四	asleep	asleep,
三六	三	a night-shrick; my	a night-shrick; and
	四	fell of hair	my fell of hair
	一	aside, quick	aside, and quick
三八	二	sand	sand,
	五	rang the sharp	rang sharp
十	七	Each looked	Each look'd

一五〇	十四 f の推移	f の推移	一八八	九 偶然たる	偶然たる	二三〇	七 赤むね	赤むね
一五一	十 she seems	she seems,	一八九	十四 何が	何れか	二三四	六 根底存在	根底あつて存在(以下)
一五六	四 f を伴ふらへ	f を誘起せらる	一九〇	五 命を捨てて	命を捨てて			
	七 著く	f の起り来らる	一九〇	一 悉無	復			
一五七	五 Naldrein	著しく	一九一	九 Coleridge 作	著無	二四一	十四 吾人に	吾人に
一五九	一 奈邊	Waldstein	一九二	七 dan	Coleridge の	二四二	十四 Hie	telegraphs
一六〇	九 fatal	那邊	一九三	十三 發達	d-in	二四三	三 quite	fits
	十 此意味は	fatal	一九三	二 其先き	削除	二四五	四 上述の外	quit
	十三 何なく感さへ	の如し此意味は	一九五	五 現象にあらなり	復	二四七	六 詩家	改行
一六一	四 Canterbury Tales	何らなく感さへ	一九六	十一 these well-spoken days,	復	二四八	四 吾人は	譯家
	五 von Lammius	von Lammius	一九九	九 Dina 頂上	現象あり	二五〇	十三 吾人は	認むべし。吾人は
一六五	十二 表出明瞭	表出の明瞭	二〇二	十一 廣が	of York:	二五〇	十三 "O, world! O life!	"O, world! O life!
一六九	十二 (1)	(b)	二〇二	十一 寸竹	these fair well-spoken days,	二六一	十一 Burns,	"O Time!"
一七〇	一 吾人の賞讃を値する	吾人の賞讃に値する	二〇二	十一 巧み	Dina の頂き	二六二	十一 Her clear	Burns の
	二 輕侮する性質をへき	輕侮する性質をへき	二〇三	十三 寸竹	廣が	二六三	九 Herrick,	Herrick の
	を	を	二〇四	十三 匠み	寸時	二六四	五 吾人に	Herrick の
一七四	二 されらるゝかつて	されらるゝかつて	二〇五	九 Paris	巧み	二六五	九 Conceptual	Conceptual
	三 此	是	二〇七	十四 數語	Par	二六六	九 假定し得る所以なり	假定し得る所以なり
一七五	七 ogmH	Hugo	二〇七	十四 櫻まゝ	言語		假定し得る所以なり	此の如きは文學者の
	十三 雁ひある	雁ひある	二〇八	三 論辨	櫻まゝ		これより更に	真かり知らざる所
一七六	八 約をなこ	約成るる後	二〇九	一 as well as II"	論辨			す。或は Pechner の
一八四	四 out mind	out of mind	二一一	十 祖構	as well as I"			"Golden cut" (黄
一八六	八 my own door,	my own door.	二一二	十四 伴ふらりあるべきか	祖構			金壁を網する一種の
	八 young and ghostly	young and ghostly	二一四	十 威覺的	伴ふらりあるべきか			審美的切斷法の價值を
一八七	三 ghostly she	ghostly she	二一七	八 施教徒	威覺的			實驗の結果として發見
	八 綴り	綴り	二一九	八 In the beginning	施教徒			せるが如き不科學者の
				八 In the beginning	In the beginning			業として文學者は敢て

三八三	十	第三の妻の	第三の妻「 愚はあつたさうし」。	三故	故に	四五四	一	Neitherfield	Neitherfield
三九五	十一	九童	九童	四一三 六 成功したるものなり	割除	四五五	一	nonsense	nonsense
三九〇	十	遺事を忘れ	ら歌ふべき遺事を忘れ	四一四 三 found	bound	四五六	五	her	he
三九一	九	これ	て	四一六 十四 心理的解剖	心理的に解剖	四五八	十一	平凡なる境界	非平凡なる境界
三九二	十一	凝	必要	四一七 二 異なりなく	異なるなく	四六一	八	這袈	這袈
三九三	十三	hus-hud	hus-hud	四一九 二 鬼紙を	鬼紙に	四六二	一	in articulate	inarticulate
三九四	三	特更じ	殊更じ	四二一 一 様恰のの	様恰のの	四六四	三	exclaimed	exclaimed
三九六	十	Sensitive	Sensitive	四二二 十二 言語にての	言語にての	四六四	十二	I am coming; ♪	I am coming; ♪
三九九	十四	一面扇	一面扇	四二七 十四 f f に相待つて	f f f f に相待つて	四六六	二	小女戀の	小女の戀の
四〇〇	七	ab 最 e	ab は最も	四二八 一 f	f	四六八	一	若し	若し
四〇一	十二	Bride of Lammer moor	Bride of Lammer moor	四二九 十 實は	形迹	四七二	十三	襦袢	襦袢
四〇三	八	漸々	漸々	四三〇 九 表を	表現を	四七三	十四	勃卒	勃卒
四〇四	十四	a の b	a の f	四三一 九 矛盾此一段	矛盾は此一段	四七四	二	標幟、緊張	標幟、緊張
四〇六	七	異釋	異彩	四三二 六 the	the	四七五	九	得んき	論じ得んき
四〇七	七	Eighty	Eighty	四三三 十 思ひ構へて	思を構へて	四七八	九	得んき	論じ得んき
四〇八	十一	同様舞致	同様の舞致	四三四 六 the	事實は	四八二	十二	襦袢	襦袢
四〇八	四	古き室…の暗き中に	古き室…の暗き中に	四三九 十三 思ひ構へて	思を構へて	四八四	一	下し能はず	下す能はず
四一〇	一	wove	wove	四四〇 九 表を	表現を	四八八	一	寫生女にあつて	寫生女にあつては
				四四一 七 詩の團	詩團の	四九〇	九	Golden Treasury	Golden Treasury
				四四二 五 下の	F の	四九一	十三	nikka	nikka
				四四四 四 組織	組織	四九二	十二	寫懸を眺く	寫懸を眺く
				四四七 五 (平凡なる)	平凡なる	四九四	十四	差あり	差なり
				四四九 七 平淡く	平淡にして	四九五	二	shrick	shrick
				四四九 十一 Cra bbe	Crabbe	四九六	八	遣すりや	遣るりや
				四五二 一 Infustum	Infustum				

頁行 誤 正
 四九七 二二三 作者の…生ずるもの 幻惑の註
 五〇三 二 警凡て 警凡も
 三 辨 辨
 五〇七 十一 Front-de-Boulaf Front-de-Boeuf
 五二三 十三 亦理法 亦此理法
 五一四 一 薙美 薙美
 五一九 三 遂に 剷除
 四 示さるるなきにあらず 示さるる事なきにあらず
 五二〇 九 識域F 識域下
 五二二 十四 草することば 草することば
 五二四 十四 F'に安んぜずして F'に安んぜずしてF'に至り
 五二七 七 F'のF'に懸するは F'のF'に懸するは
 五三〇 七 嗤笑 嗤笑
 五三一 七 凡人 此人
 五三七 一 世俗的に 世俗時に
 五四一 一 諷刺すること 諷刺す
 五四一 六 鈍き事なるべし。 鈍き事あるべし。
 五四六 九 F'…F'中に F'…F'中に
 五四七 五 進對置法 假對法
 五四八 十一 禪に於ては特別の 禪に於て特別の
 五四九 五 削ぐのは 削ぐは
 五五〇 六 若しくはは 若しくははF

頁行 誤 正
 五五一 七 對照するはF' 對照するF'は
 五五五 五 統攝こる 統攝たる
 五五八 八 體歌 體歌
 五五九 四 Dowden Dowden
 五六〇 二 判する 判す
 五六六 一 程 一定
 五六七 七 對る 對する
 五六九 十 豫期するあり 豫期する事あり
 五七一 一 後等 後等
 二 失念せざるが如し 失念せざるが如し
 五七三 八 農を匠 農匠を
 五七六 八 附する社會的 附するに社會的
 五七七 十二 合度 合致
 五七九 十四 教言句 教言
 五八〇 四 化論 一進化論
 五八一 八 擧げて 承けて
 五八二 七 譬 譬師的
 五八三 七 Rembrano Rembrandt
 五八四 十一 Classical Poetry Classical Poetry
 五八五 七 文壇 文壇
 七 文壇 文壇

頁行 誤 正
 五八七 十三 まだ 未だ
 五八七 一 表冠 衣冠
 五八八 十 顯著 顯著
 五八九 十四 精神に〇して 精神に及して
 五九一 一 熱像 想像
 五九二 十四 歌恋 Gothic
 七 通過し〇今日 通過して今日
 九 負ふ所〇る 負ふ所ある
 十 跳梁せ〇 跳梁せる
 十三 當代 當代
 十四 憐々たるもの 憐々たるもの
 十 空路 空路
 五九七 十三 壇場 壇場
 五九九 九 後話 復活
 六〇〇 三 數 類
 四 拗損 拗損
 十 所にあつて 所に從つて
 六〇一 十 乾満の草 乾満の莽
 六一〇 一 故に 程に
 六一七 十 Jenkyus Jenkyus
 六一九 十 in exorable inexorable
 六二〇 十 事毎に非 事毎に非
 六二二 十三 好惡なり 好惡なり
 六二二 二 war was
 六二二 八 utterly uttered
 六二六 四 過ぎきも 過ぎきも

六二七	八	既來事業	既來事業
六二九	四	能はず	能はず
六三〇	十二	妖論	妖論
六三一	十	厄殺	紙體
六三二	一	著書	著書
六三四	六	自分の	自家の
六三五	十	新進作家	新進作家
	十二	源ひすん考	源ひすん考
六三六	六	抄摺	抄摺
六三七	一	詩極	詩格
	十二	Tennyson	Tennyson
六三八	五	Persecution	Persecution
六三九	七	Angelus ㄱ	Angelus ㄱ
六四〇	三	除害	除害
六四一	二	New Salon des Refusés	Salon des Refusés
		fuses	
六四四	十三	Enoch Arden	Enoch Arden
六四六	六	んぢ	んぢ
	十三	何處にあり	何處にあり
六四七	三	Ford	Oxford
		其勝殿	心の勝殿
	四	Morris	Morris
	十四	鼻の微塵	鼻の微塵
六四九	十四	Browning	Browning
六五三	十二	逸照	返照
六五五	一	斯の如き彼等の	斯の如き便法の彼等の
	三	無風雅なるは	無風雅なる
六五六	五	Godwin	Godwin の

Political

五五八 二 重なる要なる

六六〇 三 特色ある

六六一 四 けに面して

六六二 六 變りゆくもの

六六三 七 西洋主義の日本主義

六六四 十 至つては

六六五 一 生誕ある

六六六 二 歴ある

六六七 七 發現

六六八 二 發現

六六九 十三 發現するもの

六七〇 九 答へるのみならず、彼

六七二 六 答へるのみならず、彼

六七三 六 答へるのみならず、彼

六七四 六 答へるのみならず、彼

六七五 六 答へるのみならず、彼

六七六 六 答へるのみならず、彼

六七七 六 答へるのみならず、彼

六七八 六 答へるのみならず、彼

六七九 六 答へるのみならず、彼

七〇〇 三 millionett

七〇一 六 答へるのみならず、彼

七〇二 六 答へるのみならず、彼

七〇三 六 答へるのみならず、彼

七〇四 六 答へるのみならず、彼

七〇五 六 答へるのみならず、彼

七〇六 六 答へるのみならず、彼

七〇七 六 答へるのみならず、彼

七〇八 六 答へるのみならず、彼

七〇九 六 答へるのみならず、彼

七一〇 六 答へるのみならず、彼

七一一 六 答へるのみならず、彼

七一二 六 答へるのみならず、彼

七一三 六 答へるのみならず、彼

